

## 韓国KOITA第16回 技術経営人 夏季特別セミナー 概要

韓国のKOITA(Korean Industrial Technology Association)は参加企業数9,000社に上る大きな組織で、研究開発の推進、イノベーションに関する諸活動を行っている。毎年夏に会員企業のための夏季セミナーを開催しており、以下は今年済州島(JeJu)で開催されたセミナーの概要である。本年のこの機会に、KOITAとJATES間で相互協力事業を進めるMOUが締結された。

### □セミナーの目的(主催者による)

- 国内・外の技術環境変化による理解および対応戦略の提示
- 新事業事業の考察、情報交流および再充電の機会提示

### □プログラム

- 日程:2009.7.17(金)~19(日)【2泊3日】
- 場所:韓国、チェジュ島(新羅(シンラ)ホテル)
- 参加企業数:約300社(技術経営CEO・CTOなど)、参加者数は約400名
- テーマ:危機を超越未来へ
- プログラム
  - 経営講演:基調講演1回、特別講演2回、経営講演3回
  - 文化講演:文化・教養、教育、健康など5回
  - 交流の場
- KOITA会長主催の宴会および記念講演

### □講師

- 開会の辞:現代起亜自動車 副会長 李賢淳氏(会長の代理)  
現在の経済危機下でのR&Dの重要性、産学連携推進の必要性、に言及。
- 祝辞:KOITA名誉会長 東亜製薬 会長 姜信浩(カン・シノ)氏  
不況時でも企業の研究開発は伸びている。GDPの5%を達成すべきだ。として、具体的には、LED、ハイブリッド自動車、太陽電池に言及された。
- 基調講演:韓国教育科学技術部 長官(実際は代理の政策企画官)
- 特別講演:サンスン電子 常任顧問 尹鍾龍(ユン・ジョンヨン、Jong-Yong Yun)氏  
KAIST(韓国産業技術研究所)総長
- 経営講演:韓国芸術総合学校 教授  
Bain & Company アジア代表  
MIRAE ASSET 金融 グループ 会長
- 文化講演:教育評論化 / 韓国初宇宙人 / PERFORMANCE TRAINING 代表  
/ ソウル大学 教授 / リュウ・シファ 詩人他

### □概要

#### (1) 規模の大きさ

まず、行ってびっくりしたことは規模の大きさである。JATESで最も大きな会議は「技術経営会議」夏の本会議であるが、その会議でも150人程度であるのに対して、こちらKOITAは今年400人、不景気で参加者が少なく例年だと500人くらいだとの話であった。午後にはゴルフが組まれており、こちらも盛大。上記の80歳になろうという名誉会長姜氏自ら、「わしも現役じゃ。」と参加される、全体で28組という大コンペ。(JATES土光杯は5組揃えば良い方。)

KOITAは企業の研究所等の認定をやっているとのことで、産業界としてはこの認定が取得できると減税(研究開発税制優遇)が受けられる。そのような、公的施策と結びついているため、大から小まで多くの企業が参加しているものであろう(約9,000社が会員)。

(2) 科学技術、研究開発活動への篤い思い

韓国はわが国にとってパートナーでもあり、ある意味ではコンペティターでもある。日本にいるとコンペティターとしてのイメージが強かったが、改めて現地に来てみると地理的に近く日本とは古くからいろいろなつながりがあった。気持ち通ずるものがある。むしろ、パートナーとして、ものによっては先達者として学ぶべきところも小さくないと感じた。

特に、科学技術、研究開発活動には異口同音、重要性、社会を支える根幹として認識されその活動が停滞してはならない、伸ばされなければならない、と訴える声が強かった。

(3) サムスン電子前副会長ユン氏

この方は2008年5月まで副会長をされていた方で、現在は顧問となっている。技術経営論、わが国でのMOTに相当する議論を展開されたが、それはスケールの大きなものであった。

まず、氏は「持続的成長」を最重視する。始められた第1部の議論は、紀元前3千年のエジプト、メソポタミア、アッシリアで始まった商業から説き起こし、前2千年に今のシリアに国際的な商社が設立されたとする。前500年にはシルクロードが完成し、焼き物の取引が始まった。

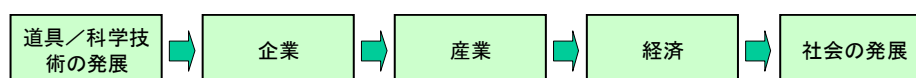
紀元後となって中世に近代企業形態ができた。ルネサンス以降イタリア(メディチ家)、スペイン、ポルトガルが世界を制覇したが、小国であったオランダ、英国に次第に取って代わられた。一時期はスペインとポルトガルが世界を二分していたものが、きわめて短期間で英、蘭に取って代わられた。その背景には健全な商業政策があった。その意味で、NYタイムズがこの1千年間で最も偉大な人物としているのがエリザベス1世であるというのうなずける。

その後には産業革命が英国で起こった。氏は、おそらく副会長職を辞されて後のことと思われるが、実際に産業革命発祥の英国Iron Bridge、Coalbrookdale(コークス燃料鉄鋼業発祥の地)を訪問し、実地に検証をされたというから半端でない。

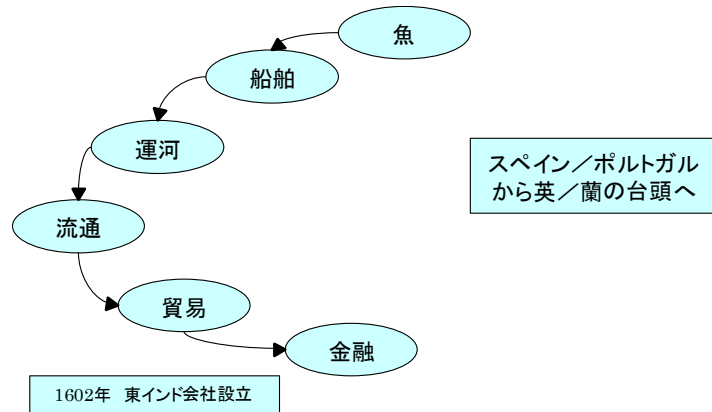
「持続性」という観点で、世界で200年以上続いた企業は5,586社あるという。中では、日本がトップで56%を占める、2位がドイツで15%、以下、オランダ、フランス、英国、ロシアの順、米国は若い国なので少ない。100年以上持続している企業となると5万社に上るが、その中で韓国は2社に過ぎない、と言われていた。日本が落ち目だという声強い中、意外な日本の強みを発見。

世界最古の企業が日本にあり、「金剛組」という。この企業は聖徳太子が572年に百済から招へいた建築技術者がそのまま近畿地方に滞在し、作った会社だという。企業の組織自体は時代とともに変わっていったが、とにかく今日まで継続して事業を営んでいる最古の、尊敬すべき存在である。

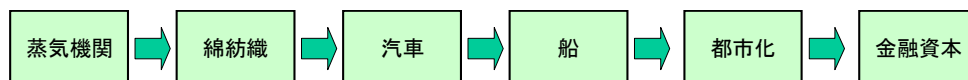
第2部は「道具と科学技術の重要性」というテーマ。氏は、政治よりも文学よりも「道具と科学技術」が人類を発展させてきた、と説く。技術は戦争、宗教、文学よりも社会を変革させる。



このことは、歴史的にも実証できる。下図は英国の台頭が産業技術力によるものであることを示す。

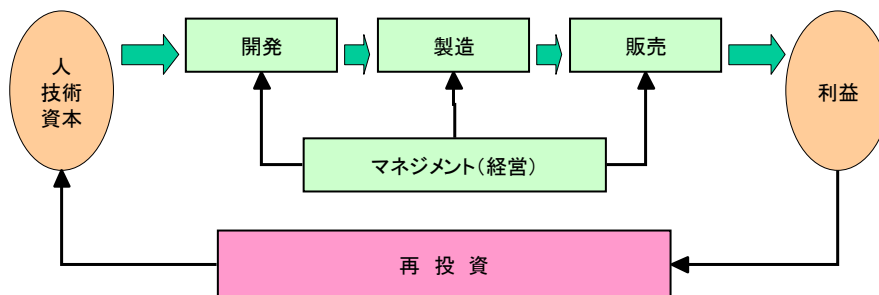


(図は手元のメモに基づく(資料配賦はなし)もので、推定部分を含む。) 産業革命時においても、技術を原動力とする下のサイクルを見ることができる。

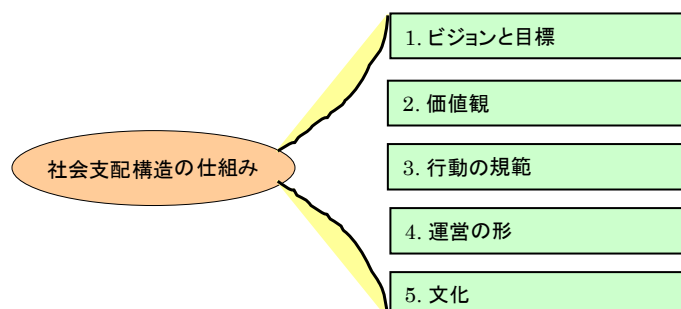


第3部で、それでは企業継続のための要因や力は何かを説明された。まず第1が「環境の先取り」である。長期持続に成功している企業はすべて「昆虫戦略」、すなわち周囲に合わせて生きる、ことに徹している。氏は、18世紀の産業革命以後50年サイクルで大きな変動が起きているという。綿、鉄、自動車、そして現在のデジタル化、である。この環境変化を先取りした企業が生き残れる。

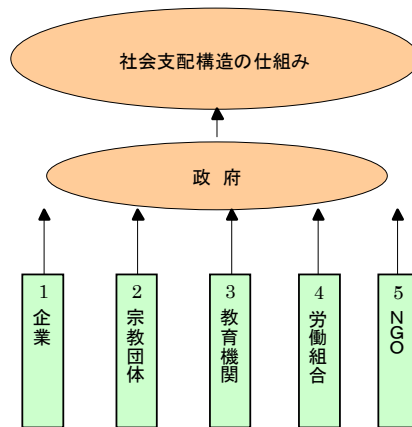
第2が「効率的な経営」である。1997年のアジア危機の際、韓国はIMFの介入を受け、サムスンも工場改革を余儀なくされ、物的、人的に大きな犠牲を払った。資源とプロセスを分離する、イノベーションが連続して起こるようにすることが、肝要だと思っている、として下図のようなチャートを示された。



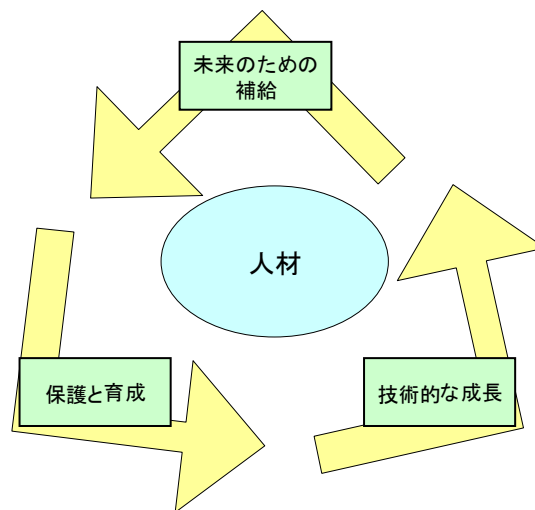
第3が「健全な社会と支配構造」である。



インターネットの普及で変化してきた。



第4が「優秀な人材確保と育成」である。



最後に氏は、”The future is not be predicted, but to be created.”、未来は予測できないから人材が必要なのである、と締めくくられた。

#### (4) 韓国の科学技術政策について

現在、韓国は李明博大統領のもとで、経済危機下の今こそ科学技術投資を強化すべし、として諸施策を推進している。本年4月21日、大統領は「科学技術で未来を強くする。」旨の方針を示した。「科学技術こそ、強い韓国を作る力の源泉である。経済危機で世界各国が停滞する今こそ、むしろ科学技術投資に拍車を加える時期だ。幸いにも、最近、韓国企業は、難しい経済条件にも関わらず、研究開発に対する投資を増やす努力をしている。かつてのIMF救済金融危機の際には、先ず研究開発費を減らし、研究員を減員することから始めたことと比較すると、励まされるものがある。」(以上は、わが国JST HPより抜粋引用。)

韓国教育科学技術部(わが国文科省に相当)によれば、その戦略は”5・7・7”とよばれる。

すなわち、まず”5”は韓国の官民を合わせた科学技術研究開発費をGDPの5%に引き上げるという目標である。現在は3.6%程度であるとのことで、2012年までに5%へ持っていきたい。

次の”7”とは、知的財産、研究開発、システムのそれぞれについて、7項目の目標を設定しそ

れを達成しようとするものである。

研究開発の7大技術分野は以下の通り。

- ・主力基幹産業技術(例:自動車、造船、機械・製造工程、半導体等)
- ・新産業創出(例:次世代システムソフトウェア、がん診断・治療、脳科学等)
- ・知識基盤サービス(例:融合型コンテンツ、先端物流、通信放送融合技術等)
- ・国家主導技術(例:衛星開発、次世代兵器、次世代原子炉技術等)
- ・懸案関連特定分野(例:食品安全性評価、ITナノ素子技術等)
- ・グローバル課題対応(例:新・再生エネルギー、気候変動予測・適応等)
- ・基礎・基盤・融合技術(例:バイオチップ・センサー、知能型ロボット等)

システム改革の7項目は以下の目標である。

- ・世界的科学技術人材養成/活用
- ・基礎基盤研究振興

政府の基盤研究費の割合を2008年の25.6%から2012年50%へ。

- ・中小/ベンチャー技術革新
- ・科学技術国際化
- ・地域イノベーション推進
- ・科学技術基盤の強化(基礎的な生物種の収集等)
- ・科学技術文化の普及(科学館拡充など青少年創造性を高める)

最後の”7”は、7大科学技術強国に仲間入りしたい、ということである。

そして、これからの科学技術政策の課題として、5項目が述べられた。

#### (1) 長期ビジョンの策定

これは、科学技術が作り出す未来の社会を分かり易く示そうとするものである。例えば、快適、健康、豊か、便利などのような分かり易さである。

(2) 現下の経済危機で民が縮まぬよう、産学連携等R&D活性化を進める。

(3) 民間の基盤強化のため、R&D減税の拡充、政府からの支援の強化、サービス産業/環境産業/先端技術の商用化を重点的に支援。

(4) 科学技術政策に関するコントロールタワーの強化(議会を含み、各部門間の政策協議会のような組織を考えているようであった)。

#### (5) 戦略的な投資

昨年完成したナロ宇宙センターからこの7月第1号衛星が打ち上げられる(ただし延期され8月7日時点では未)。この宇宙分野、さらに原子力が戦略部門である。

(以上は、今回の教育科学技術部の方の講演をもとに、一部は公表資料で補充。)

#### (5) 熱心さ

今回KOITAのセミナーに参加して、参加者の熱心さには感心するものがあった。当JATESでも多くの研究会、会議をもっているが、居眠りをされる方が多少はいるものである。今回、例えばサムスンの方のお話は話としては面白いが、2千年前のアッシリア云々では話が遠くて居眠りも出ているのではないかと振り向く(席が一番前であったので)と居眠りどころか、目は爛々と輝き、講師の一言半句も聞き逃さないぞ、という迫力が感じられた。少なくとも最後まで、居眠りしている人を見ることはなかった。

もう一点、属人的なつながりの大きさということである。再三触れている名誉会長の姜氏の大きな牽引力というものを随所で感じたものである。氏は製薬業界では日本でも有名な方で、2007年春に旭日大綬賞を受けられている。終戦まで日本におられたということもあって日本語が堪

能でいろいろな来歴を聞かせて下さった。16年前にこのセミナーを始めた時、参加はわずかに40社であったとのこと。今日の盛況を見ると感深いものがあるとのことであった。この老氏が3日間会場の最前列に陣取って、一刻も休むことなく参加されている姿には感動すら覚えたものである。

野球では韓国と日本は伯仲しているが、ゴルフや囲碁の世界では既に差をつけられたと言って差し支えないであろう。産業分野、メモリやテレビでもわが国は後塵を拝する立場となってしまった。MOT(技術経営)でも独自の論が展開され、わが国として学ぶべき個所が多々見られた。ハングル語がネックではあるが、お隣韓国から大いに学ぶべきところは学びたいもの、と思ったKOITA大会であった。(以上記事は抜粋で筆者が恣意的に選択したものです。太田記。)



KOITA大会夜のパーティ風景  
(福引き景品の中にはLEDテレビも)